

## 論文審査の結果の要旨

リアルワールドデータを用いたピボキシル基を有する抗菌薬の  
使用実態並びにカルニチン欠乏症発現リスクに関する研究

**Research on the Actual Clinical Use of Pivoxil-Conjugated Antibiotics and the  
Associated Risks of Carnitine Deficiency Using Real-World Data**

論文提出者 鈴木 香帆 (Suzuki, Koho)

この研究は、小児へのピボキシル基含有抗菌薬（PV）の使用実態とカルニチン欠乏症の発現リスクについて、実臨床の中で得られる医療データ（リアルワールドデータ）を用いて調査したものである。PV はバイオアベラビリティを改善するために使用される抗菌薬で、我が国では中耳炎などの治療に広く使われている。しかし、副作用としてカルニチン欠乏症が知られており、特に小児では重篤な症状を引き起こすことがある。2012 年には PV の小児への使用に関する注意喚起が行われたが、大規模な実態調査は行われていない。国立成育医療研究センターの小児医療情報収集システム（P-MICS）を利用し、PV の処方実態、カルニチン欠乏症の発現と投与日数の関係、発現時の検査・治療状況、PV 投与時のカルニチン欠乏症発現リスクを調査した。データは 2016 年 4 月 1 日から 2021 年 3 月 31 日までのものを使用し、傾向スコア・マッチング法を用いて解析した。その結果、調査期間中、PV の処方例数は年々減少していた。カルニチン欠乏症の診断例は少なく、低血糖と診断された症例が多かった。PV 投与時のカルニチン欠

乏症発現リスクは小児感染症に使用される非 PV 抗菌薬アモキシシリンと比較して特段高いものではなかった。PV の処方件数が減少しているのは、抗菌薬の適正使用が促進された結果と考えられる。低血糖と診断された症例ではカルニチン検査が行われていないことから、さらなる注意喚起が必要である。PV 使用時のカルニチン欠乏症発現リスクは他の抗菌薬と比較して高くないことが示唆されたが、今後のデータ集積と再検討が必要である。

以上、審査会における発表と質疑応答、その後の最終論文作成を通じて、本論文が博士（薬科学）の学位に相当するものであると認める。

令和 7 年 2 月 28 日

主査 明治薬科大学 教授

森 田 雄 二 印

副査 明治薬科大学 准教授

野 澤 玲 子 印

副査 明治薬科大学 准教授

安 武 夫 印

なお、上記の者が提出した博士学位論文（本論文）について、剽窃のチェックを行った結果、問題は認められませんでした。

令和 7 年 2 月 28 日

主査（自署）：